

古代集落の構造と変遷

道上 祥武（奈良文化財研究所）

I はじめに

古代官衙・集落研究会は官衙研と称されるが、古代の官衙と「集落」に関する研究会である。研究集会は昨年で第28回を迎えたが、古代の集落遺跡そのものをテーマとした企画は長らくおこなわれてこなかった。2020年から2024年の5年にわたって、これまでの遅れを取り戻すように古代集落に関する企画を連続して開催した。本稿は、その5年間にわたる議論の成果を総括する。

II 古代集落の分析視点

まず、古代集落の構造を検討するにあたり、どこに分析視点を置くかを共有した。そして、建物群の規模（占有面積）と構成、建物（住居）の規模、倉の所有形態などを主要な分析視点に設定した。

（1）建物群の構成

建物群は「複数の竪穴建物または掘立柱建物で構成される建物の集合」を指す。古代集落を構成する建物群の把握は、集落研究における黎明期より試みられており（文献32）、本企画でもその把握・分析手法の最適化について議論を重ねてきた。

各報告で示されたように、古代の集落遺跡において、建物群を柵や溝などの圍繞施設で明確に区画する例は稀であり、これも古代集落の特徴の一つである。今回、建物群の把握方法についても様々な方法論が示されたが、建物分布の粗密、同時期のまとまった複数の建物を一つの建物群として認識していく見方がもっとも汎用性があり、オーソドックスなものといっていだろう。ただし、この方法を成り立たせるには各遺構の正確な時期決定と、それにもとづく詳細な遺構変遷図の作成が不可欠となる。

上記以外の建物群の把握方法として、集落内部での立地に着目して建物群を把握する方法、集落内で

核となる（超）大型建物の分布を指標とする方法が提示された。大型建物の分布への注目は建物の粗密だけでは建物群の判断が難しい場合に有効である。また、異なる規模の建物の組み合わせに注目する視点も示された。

建物群の認定は竪穴建物主体の集落か掘立柱建物主体の集落かでも事情が異なる。掘立柱建物の棟方向によるグルーピングは時期決定だけでなく、建物群の把握にも有効だが、竪穴建物ではカマド配置（＝入口の位置）も利用できる。ただし、建物方位については、大阪府池田寺遺跡の再検討で指摘されたように、微妙に存在する建物方位の乱れに注意が必要である（文献18）。上記のような各地に共通する方法のほか、集落内部に地割を想定する例（文献16）、「廃棄土坑」が付随する単位を建物群とする例（文献36）、丘陵斜面の加工など地形造成を踏まえる例など（文献25）、各地特有の方法も示された。

（2）建物群と倉

倉の所有形態も集落構造や機能、集団編成原理を考える上で重要な分析視点となる。各地の事例を検討する中で、倉を所有する建物群と倉を所有しない建物群だけでなく、複数の建物群で倉を共有する例も確認することができた。また、官衙や有力者層の居宅に大型または複数の倉が付随する例がある一方、周辺集落の倉が希薄となっていく地域が複数存在する。これらは、代表的な集落に居住した有力層または官衙施設に隣接する形で、小地域内の倉が一括で管理されていた可能性が考えられる。古代集落における多様な倉の所有形態があきらかとなった。

（3）建物群の占有面積

『集落3』では建物群の占有面積について整理をおこなった（文献33）。各地の集落遺跡から抽出した建物